

第11回日本皮膚科心身医学会

こころから、皮膚を診てみよう

ランチョンセミナー

こころと髪科学！

開催日時 2021年 1月24日(日) 12:20~13:10

会場 都市センターホテル 5F スバル

座長

順天堂大学医学部・大学院医学研究科 教授
順天堂東京江東高齢者医療センター
皮膚科 科長

植木 理恵先生

演者①

円形脱毛症とストレス

浜松医科大学皮膚科学講座 准教授・
病院教授

伊藤 泰介先生

演者②

脱毛症患者における ウィッグの心理的 QOL 改善効果のエビデンス

大阪大学大学院医学系研究科
皮膚・毛髪再生医学寄附講座 特任教授
心斎橋いぬい皮フ科 院長

乾 重樹先生



演 者①

浜松医科大学皮膚科学講座 准教授・
病院教授

伊藤 泰介 先生

▶ 円形脱毛症とストレス

円形脱毛症は一般に精神的ストレスによって発症するのではないかと考えられているが、実際にはそうではない症例も多い。病態を考える上で最も理解しやすい誘引はウイルス感染症である。インフルエンザウイルスなどの感染に伴って形質細胞様樹状細胞からのIFN- α 産生に引き続く細胞傷害性T細胞の活性化、IFN- γ 産生、免疫寛容の破綻、自己抗原の認識、という免疫反応が想定される。一方で強い精神的ストレスの後に円形脱毛症を発症する症例も経験する。また精神疾患の合併についての報告も認められる。円形脱毛症と抜毛癖がしばしば合併すること、脱毛症状自体がストレスであることから、円形脱毛症と精神的な側面の関わりは切ってもきれない関係である。

さて毛組織はストレスホルモンの影響を受けやすい組織であることを我々は実験的に確認している。ヒトはストレス環境下において視床下部よりCRHが分泌され下垂体よりACTHやカテコラミンの分泌を促す。ACTHは副腎皮質より糖質コルチコイドを産生させ、ストレスによる組織障害を和らげる働きをする。この一連の系をhypothalamic-pituitary-adrenal axis(HPA axis)と呼んでいる。我々はヒト毛包自体にHPA axisが機能的に存在していることを実験的に証明してきた。これはヒト毛包の組織培養においてCRHを添加することによってACTHの発現が亢進し、さらに糖質コルチコイドの産生が毛組織自体で行われることを見いだした。このストレスホルモンCRHはヒトやマウスの毛包周囲の肥満細胞にも影響を与える。肥満細胞は毛包周囲に密に存在しているが、そこには肥満細胞の前駆細胞も存在しCRHによって成熟肥満細胞が増殖することが我々の研究で示唆された。これにはStem cell factor が関与し脱顆粒することで毛包の成長を妨げる因子になる。また肥満細胞は自らもCRHを産生している。最近の研究ではカフェインがストレスホルモンによる毛髪ダメージを和らげる可能性があるという報告もある。

そもそも円形脱毛症の症状自体が精神的な苦痛、日常生活に多大な影響を与える疾患であり、患者さんにとって何がストレスかといえば、抜けていること自体がストレスだという。脱毛症状によってどのような支障が日常生活、学校生活でおきているのか、またそれに対してウイッグも含めてどのような対応策をとっているのか、脱毛症外来患者さんからの訴えをもとにまとめてみたい。

略 歴 等

【略歴】

1995年(平成7年)3月 産業医科大学医学部卒業
1995年(平成7年)5月 浜松医科大学皮膚科入局研修医
1996年(平成8年)6月 静岡県立総合病院皮膚科研修医
1997年(平成9年)9月 浜松医科大学皮膚科 助手
2002年(平成14年)2月 ドイツ ハンブルグ大学エッペンドルフ
病院皮膚科(ラルフパウス教授)留学
2004年(平成16年)2月 浜松医科大学皮膚科 助手
2006年(平成18年)4月 浜松医科大学皮膚科 講師、病棟医長
2009年(平成21年)4月 浜松医科大学皮膚科 講師、医局長
2015年(平成27年)2月 浜松医科大学皮膚科 病院准教授、
医局長

2019年(平成31年)4月 浜松医科大学皮膚科学 准教授
2020年(令和2年)10月 浜松医科大学皮膚科学 病院教授

【所属学会】

日本皮膚科学会(代議員)、日本皮膚科心身医学会(評議員)、
日本研究皮膚科学会(評議員)、欧州研究皮膚科学会、
日本免疫学会、日本皮膚免疫アレルギー学会(評議員)、
日本小児皮膚科学会(運営委員)、日本臨床皮膚科医会、
日本皮膚悪性腫瘍学会、日本毛髪科学協会(理事)、
毛髪科学研究会(世話人)、日本乾癬学会、
日本美容皮膚科学会(評議員)、日本褥瘡学会



演者②

大阪大学大学院医学系研究科
皮膚・毛髪再生医学寄附講座 特任教授
心齋橋いぬい皮フ科 院長

乾 重樹 先生

▶ 脱毛症患者におけるウィッグの心理的QOL改善効果のエビデンス

脱毛症は患者の心理状態に大きな影響を及ぼすものであるから、脱毛症状をカモフラージュするウィッグは外見上への影響だけでなく、内面的な生活の質(Quality of life: QOL)へも大きな効果があることは予想がつく。しかしながら、ウィッグの心理的な効果について医学的見地から調べられた報告は希少であった。今回はウィッグの社会心理的効果とそのエビデンスについて演者らの研究知見を中心に述べる。

福祉用具心理評価スケール(psychosocial impact of assistive device scale: PIADS)を用い、脱毛症患者におけるウィッグのQOLへの影響を検討した。PIADSは0を不変として-3から+3までで評価される26の項目からなり、それらの項目は効力感、積極的適応性、自尊心に分類され、正の点数はQOLの改善を意味する。ウィッグを使用していた49名の円形脱毛症女性患者にPIADSアンケートに答えて頂くと同時にウィッグ装着時の見た目への満足感を視覚的評価スケール(VAS)で評価した。その結果、PIADS平均はベースラインである0に比べて有意に増加し(p<0.001、マンホイットニーU検定)、さらに、効力感、積極的適応性、自尊心の3因子も増加しており、心理的QOLがウィッグによって改善することが証明された。また、PIADS合計、効力感、積極的適応性、自尊心のいずれもウィッグ装着時の見た目への満足度と正に相関し(p<0.05、スピアマンの順位相関係数)、患者への心理的効果には整容的満足が重要であった。

同様にウィッグを使用している男性型脱毛症の男性患者26名においてPIADS平均、効力感、積極的適応性、自尊心はいずれも改善し(p<0.001、マンホイットニーU検定)、ウィッグ装着時の見た目への満足度やノーウッド-ハミルトン分類による男性型脱毛症重症度と正に相関した(p<0.05、スピアマンの順位相関係数)。女性型脱毛症患者20名でもPIADS平均、効力感、積極的適応性、自尊心の3因子はともにベースラインである0に比べて有意に増加していた(p<0.001、マンホイットニーU検定)。ウィッグ装着時の見た目への満足度や重症度と相関しなかったが、ウィッグ装着時の見た目への満足度はVAS8.02+/-1.43で、十分な満足感が得られていた。

以上のエビデンスに基づいて2017年に策定された脱毛症ガイドラインでは、円形脱毛症に対して推奨度B(使用するよう勧め)、男性型脱毛症および女性型脱毛症に対して推奨度C1(使用してもよい)との評価を受けることとなり、エビデンスとガイドラインに基づいて脱毛症患者にウィッグを勧めることができる。

略歴等

【略歴】

1991年 大阪大学医学部医学科卒業、医師免許取得
1991年 大阪大学医学部皮膚科学教室入局
1992年 大阪労災病院皮膚科医員
1996-8年 米国留学(ウイスコンシン大学、ロチェスター大学)
この間、1997年 大阪大学大学院博士課程修了、学位取得
1999年 大阪大学医学部皮膚科学教室医員
2000年 大阪大学医学部皮膚科学教室助手
2006年 大阪大学医学部皮膚・毛髪再生医学寄附講座
准教授(附属病院皮膚科兼任)
2016年~ 心齋橋いぬい皮フ科院長
2016-8年 大阪大学大学院医学系研究科皮膚科学講座招聘教授
2018年~ 大阪大学医学部皮膚・
毛髪再生医学寄附講座特任教授

【専門医資格】

日本皮膚科学会専門医、日本アレルギー学会専門医・指導医、
日本褥瘡学会認定師(医師)、日本抗加齢医学会専門医

【学会役職など】

日本臨床毛髪学会理事長、日本毛髪科学協会副理事長(資格審査
委員会委員長、中長期事業計画委員会委員)、日本美容皮膚科学
会理事(雑誌編集委員会委員長、推薦委員会委員、学術教育委員
会委員、用語集検討委員会委員)、日本皮膚科学会代議員、毛髪科
学研究会世話人・監事、日本研究皮膚科学会評議員、日本アレルギー
学会専門医制度試験問題作成委員、日本抗加齢医学会評議

員、日本皮膚免疫アレルギー学会評議員(広報委員会委員)、日本
褥瘡学会評議員、日本化粧品療法学会評議員、Editorial-in-Chief,
Hair: Therapy & Transplantation, Senior Editor, ScienceJet
(Nanoscience and Nanotechnology Section), Editorial
Board, ISRN Dermatology, Journal of Cosmetics,
Dermatological Sciences and Applications, Case Reports
in Dermatological Medicine, Associated Faculty member
of F1000 (Post-publication peer review)

【受賞】

第3回国際毛髪科学学会、Oral Presentation Award, 2001
第27回日本接触皮膚炎学会学術大会 ポスター賞、2002
JSID Shiseido Fellowship Award, 2003
第4回ガルデルマ賞、2003
第24回日本美容皮膚科学会
アイデアアンドイノベーション賞、2006
第107回日本皮膚科学会総会 ポスター賞、2008
第8回日本抗加齢医学会総会 奨励賞、2008
第72回日本皮膚科学会東部支部総会 会長賞、2008
平成22年度日本皮膚科学会雑誌論文賞(The Journal of
Dermatology), 2010
F1000Prime AFM Travel Grant 2013
JD Award, Most Downloaded Articles in 2013
第14回日本抗加齢医学会総会プレナリー賞、2014
第33回日本美容皮膚科学会優秀演題賞、2015